

Meikai University Department of English
**Recommended Reading
for Eibei Students (Ver. 11)**



教員の本棚シリーズ 2

推薦図書 2021

明海大学外国語学部英米語学科

英米語学科学生のための推薦図書 (Ver. 11)

目次

- | | |
|-------------------------|---|
| 1. はじめに…………… | 3 |
| 2. 2021 年度 英米語学科教員…………… | 4 |
| 3. 英米語学科教員による推薦図書…………… | 5 |

1. はじめに

「英米語学科学生のための推薦図書」編集委員

津留崎 毅

“Seeing is believing”(「百聞は一見にしかず」)という言葉があります。これは「直接経験」の重要性を指摘したものと言えます。しかし、人が直接経験によって知り得ることには限界があります。直接経験のみを頼りにすることは、自分を取り囲むごく狭い世界の中に自分の人生を閉じ込めてしまうことです。

優れた書物は、直接経験によっては知り得ないような多様な世界について、宇宙について、人間について、人生について——ありとあらゆることについて、偉大な先人たちが、どのように捉え、どのように理解し、どのように対処してきたのかを教えてください。

この冊子には、英米語学科の専任教員が皆さんに是非読んで欲しいと願う図書についての推薦文が収められています。推薦されている図書の多くは、図書館や推薦者の研究室に行けば借りることができます。卒業までできるだけ多くの本を読み、豊かな人生を送るための指針を手に入れてください。*

* 昨年度から、この冊子の表紙に「専任教員の研究室の本棚」の写真を使うことにしました。シリーズ第2弾は、小林裕子研究室(1704)の本棚です。

2. 2021年度 英米語学科教員

Fukui, Eijiro	福井 英次郎	(1721 研究室)
Hayashi, Tomoaki	林 智昭	(1623 研究室)
Hiyoshi, Nobutaka	日吉 信貴	(1624 研究室)
Kawahara, Shinichi	河原 伸一	(1714 研究室)
Kawanari, Mika	川成 美香	(1706 研究室)
Kotani, Tetsuo	小谷 哲男	(1620 研究室)
Kobayashi, Yasuko	小林 裕子	(1704 研究室)
Maeda, Takako	前田 隆子	(1506 研究室)
Matsui, June-ko	松井 順子	(1723 研究室)
Nakamura, Keiko	ナカムラ ケイコ	(1720 研究室)
Shimada, Tamami	嶋田 珠巳	(1702 研究室)
Tatsumi, Yūta	辰己 雄太	(1618 研究室)
Umetani, Hiroyuki	梅谷 博之	(1724 研究室)
Yokomizo, Yūsuke	横溝 祐介	(1716 研究室)

-in Alphabetical order-



3. 英米語学科教員による推薦図書

福井 英次郎

⇒高坂正堯(2017)『国際政治——恐怖と希望(改訂版)』(中公新書)

実際に手に取れることができ、読みやすい本を選ぼうと思い、新書から3冊を選びました。1冊目は、高坂正堯の『国際政治』です。もとは1966年に出版されましたがその後絶版となり、2017年に改訂版が出版されました。登場する事例は古いですが、議論そのものは半世紀前に執筆されたとは思えないほど、国際政治の根幹を鮮やかに描いています。私は毎年、授業前の春休みにこの本を読み、自分の土台を振り返ることにしていますが、いつも新たな発見がある本でもあります。なお筆者の高坂は日本の国際政治学の礎を築いた研究者であると同時に、保守の論客として論壇を牽引しました。他にも多くの著作も残していますが、『古典外交の成熟と崩壊』『宰相吉田茂』『海洋国家日本の構想』(すべて中公クラシックス)なども、お薦めです。

⇒細谷雄一(2012)『国際秩序——18世紀ヨーロッパから21世紀アジアへ』(中公新書)

国際政治をより深く理解するためには、個々の事例を見るだけでなく、根底にある国際政治の構造を読み解く必要があります。この本は、均衡・協調・共同体の3つの原理に沿って、18世紀の欧州から現在までの国際政治の構造を議論していきます。この本を通じて国際政治の読み解き方を学ぶと、現在の国際情勢をより深く理解できると思います。

⇒遠藤乾(2016)『欧州複合危機——苦悶するEU、揺れる世界』(中公新書)。

3冊目は欧州の現状を扱った本です。欧州はこの10年ほどの間に、経済的に危機的状況になっただけでなく、中東や北アフリカの政情不安によって拡大した難民の流入によっても危機的状況を迎えています。この本では、それらを丁寧に追いつつ、欧州統合の過去・現在・未来を検討していきます。この本の出版後、EUからの英国の離脱や新型コロナウイルス対策、EU加盟国間の深刻な対立など、危機

は増加して、より深刻化しているように見えます。欧州統合とその成果物である EU は、壮大なる社会実験の側面があり、何をどのように見るのかによって評価は変わります。この本を読んだ後で、改めて現在の欧州の情勢を観察してみると、多くの発見があると思います。

林 智昭

☞寺澤盾 (2008)『英語の歴史:過去から未来への物語』中央公論新社

cafe をはじめ、英語・フランス語に似通った語が多く感じられる理由は？ five と fifth, wise と wisdom など、綴り (spelling) と発音の繋がりが見えにくいのはなぜでしょうか。英語を学ぶ過程で感じる素朴な疑問の数々を紐解く手がかりを、歴史が教えてくれることがあります。現在、世界共通語である英語は、昔からその地位にあったわけではありません。本書では、現代英語へ至るまでの変化の歴史が、わかりやすく丁寧に解説されています。きっと、長年の疑問に答えてくれることでしょう。

☞行方昭夫 (2017)『英語のセンスを磨く:英文快読への誘い』岩波書店

英語の授業で、文法への苦手意識を抱いたことはあるでしょうか。「コミュニケーションの役に立つのか」と、英文法は何かと避けられがちです。しかし、英文に書かれたメッセージを正確に読み解けないまま、果たして意思疎通ができるのでしょうか。上級の読解教本である本書を読破すれば、大学入学以前に学んだ英文法の知識を活用して、英文を正確に読み解く「精読」の技術を習得することができます。本書は、文型、品詞、(関係)代名詞、分詞構文、時制、仮定法といった文法事項と新出語彙が体系的に配置され、応用・発展的な英文を読み進めていく過程で学習が深まっていく構成となっています。新聞・週刊誌の高度な英語を正確に読みこなすグローバルな知識人を目指したい皆様に、おすすめの一冊です。

☞加藤重広(2019)『言語学講義:その起源と未来』ちくま新書

「言語学」と聞いて、どのようなイメージを思い浮かべますか。外国語、辞書、単語(帳)、文法、発音、活用、コミュニケーション、若者ことば、言語変化、標準語と

方言、東京方言、関西弁、言語調査とフィールドワーク、危機言語、「正しい日本語」、子供の言語習得、バイリンガル、英語教育。これらのキーワードは、いずれも言語学に関わるものです。本書は「言語学」と呼ばれる分野の研究テーマと歴史を紹介しています。20世紀、言語学は「認知科学」の一領域となりました。今日、国内の大学院において「言語科学」の名を冠した研究科は珍しくありません。著者の問題意識は広く学際的である一方、言語学の原点と基本を重んじ、その未来を案じる堅実な姿勢が伝わってきます。言語をめぐる身近な話題をきっかけに、言語学の魅力を知ることができる一冊です。

日吉 信貴

☞上野千鶴子(2008)『サヨナラ、学校化社会』ちくま文庫

大学生活においてはレポート提出を求められる機会が多々ありますが、みなさんの中には「レポートってどんなこと書けばいいの!？」と途方に暮れている人も少なくないのではないのでしょうか? この本を読めば、(少なくとも一部の)大学教師が、学生のレポートに対して何を求めているかがよく分かります。

☞中川淳一郎(2014)『夢、死ね!——若者を殺す「自己実現」という嘘』星海社新書

タイトルはどぎついし、本音炸裂で所々非常にお下品でもありますが、みなさんの大学卒業後のキャリア形成を考える上で、これほど参考になる本はなかなかないのでと思います。すでに「夢」や「目標」がある人も、「やりたいこと」が見つからない人も、是非本書を手にとって「仕事」について考えてみて下さい。

☞佐藤優(2017)『嫉妬と自己愛——「負の感情」を制した者だけが生き残れる』中公新書ラクレ

他人に嫉妬して苦しんでいる人と、他人から嫉妬されてしんどい思いをしている人はもちろんのこと、嫉妬心が全くない人にも読んで欲しい一冊です。嫉妬というと

女のするものという偏見があるかもしれませんが、本書では男の嫉妬の恐ろしさについても長々と論じられています。なお、本書の中では、嫉妬と自己愛を考えるための様々な本が紹介されていますが、その中でも、本谷有希子の『腑抜けども、悲しみの愛を見せろ』（講談社文庫）、綿矢りさの「いなか、の、すとーかー」（『ウォーク・イン・クローゼット』講談社文庫に収録）、柚木麻子の『ナイルパーチの女子会』（文春文庫）は特にオススメなので、こちらの方も是非読んでみてもらいたいと思います。

河原 伸一

☞城山三郎（1980）『官僚たちの夏』新潮文庫

私は、大学3年生の時に、この本に出会いました。本書は、その後の私の進路を決定したという意味において、私にとってまさに「運命の書」です。

☞グラハム・アリソン／宮里政玄（訳）（1977）『決定の本質—キューバ・ミサイル危機の分析』中央公論社 ☞原著: Allison, G.& Zeilkow, P.(2nd Ed.) (1999). *Essence of Decision—Explaining the Cuban Missile Crisis*. Pearson Longman.

☞ハンス・モーゲンソー／現代平和研究会（訳）（1986）『国際政治—権力と平和』福村出版

学部学生の時、この2冊を読みました。この2冊も私にとって「運命の書」となりました。国際政治学を専攻しよう、米国の大学・大学院で学ぼう、そして、大使館や国際機関で外交にたずさわり、世界平和に貢献しようと思うきっかけとなった本です。

川成 美香

井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』大修館書店

日本文化は「高コンテキスト文化」といわれている。日本語で的確に表現するのは、「場・コンテキスト」や「わきまえ」をいかに適切に認識するかにかかっている。日本文化と日本語のコミュニケーションを包括的に捉え、文化と言語の関わりを明らかにする語用論の入門書である本書は、英語と英語コミュニケーションを学ぶ学生には必読といえる。

直塚玲子 (1980) 『欧米人が沈黙するとき―異文化間のコミュニケーション』大修館書店

欧米人と日本人の間の異文化間のコミュニケーションで生じる誤解や疑問を、著者の実体験や豊富なインタビューなどに基づいて紹介し、その原因を文化的背景の相違に起因すると説明している。言葉そのものを重視する欧米人、言葉の裏にある言外の意を重視する日本人、「英語の発想」を知る原点ともいえる異文化コミュニケーションの 1980 年刊行の古典である。

土居健郎 (1971/2001) 『「甘え」の構造』弘文堂

「甘え」は日本人の日常生活にしばしば見られる感情だが、著者は外国にはそれに対応する適切な語彙がないことに気づき、カルチャーショックを受けた。フロイトの精神分析、ベネディクトの『菊と刀』、サピア・ウォーフの文化言語論などを比較検討し、「甘え」理論を構築、人間心理の本質を丹念に追究した。異文化コミュニケーションにも役立つ「日本人のメンタリティー」を解き明かす名著として、1971 年の刊行以来読み継がれている。

ルース・ベネディクト/長谷川松治(訳) (2005) 『菊と刀―日本文化の型』講談社学術文庫 原著: Ruth Fulton Benedict. (2006). *The Chrysanthemum And the Sword: Patterns of Japanese Culture*. Mariner Books.

第二次大戦中の米国戦時情報局による日本研究をもとに執筆され、後の日本人論の原点となった不朽の書である。著者のルース・ベネディクトは、日本人の行動や文化の分析からその背後にある独特な思考や気質を解明し、日本人特有の

性質や特徴を見事に浮き彫りにしている。“菊の優美と刀の殺伐”に象徴される日本文化の型を示し、その本質を洞察した、第一級の日本人論である。

☞塩野七生（1988）『マキアヴェッリ語録』新潮社

浅薄な倫理や道徳を排し、ひたすら現実の社会のみを直視した中世イタリアの思想家・マキアヴェッリ。「マキアヴェッリズム」という言葉で知られる彼の思想の真髓を、塩野七生が一冊にまとめた箴言集。組織とは、人間とは、リーダーとは…何か。困難な時代を生き抜くためには必要不可欠で、現代にも通じる鋭い洞察の数々を知ることができる。

小谷 哲男

☞ポール・ジョンソン／別宮貞徳・訳（2001年～2002年）『アメリカ人の歴史Ⅰ～Ⅳ』共同通信社

アメリカ合衆国の創出は人類最大の冒険である」ことに気づいたイギリス人の歴史家によって書かれた、アメリカではなく、“アメリカ人”の歴史。アメリカの歴史はたかだか 200 年少しと言われるが、多くの国の建国史が神話や伝説によって美化されている一方、アメリカ人は合衆国の創出の記録を、先住民の虐待や奴隷制度など、隠したいことも含めてつぶさに残してきた。本書は、16 世紀から 20 世紀の終わりまでのアメリカ人の歴史を膨大な史料に基づいて振り返り、アメリカ人の理想と現実の歴史に著者の主観による分析が加えられていく。ここまで赤裸々なアメリカ史の通史は他にないだろう。私も学生の時、本書を読んでアメリカへの関心をより強くした。アメリカ英語を身につけるためには、アメリカの社会や文化も理解する必要があるが、本書は日本の学校教育で学ぶアメリカ史とは違う見方を提供し、みなさんのアメリカ理解をさらに深めるだろう。

☞ジョセフ・S. ナイジュニア、デイヴィッド・A. ウェルチ／田中明彦、村田晃嗣・訳（2017年）『国際紛争：理論と歴史原書第 10 版』有斐閣

ソフトパワー論で有名な著者が、元々はハーバード大学の 1 年生のために書い

た国際関係論の入門書だが、現在では世界中の大学で教科書として使われている。入門書とは言っても、国際関係論の理論や概念を丁寧に解説していくものではなく、理論や歴史を使って国際政治を考えるアプローチの見本を示しているため、初心者にはやや難解だ。いきなり古代ギリシア時代のペロポネソス戦争から説き起しているため、少なくとも歴史に一定の知識がないと読み進めることはたやすくはないだろう。原書の英文も読みやすいが、和訳版は日本を代表する国際政治学者が訳しており、和文でも読みやすい(実は私も下訳を担当した)。私は国際会議で著者と一緒になることがあるが、その鋭い分析にはいつも感銘を受ける。国際関係論に関心のある人には、ぜひナイ教授がどのように国際政治をみているのか、本書を通じて知ってもらいたい。

☞高坂正堯(2008年)『海洋国家日本の構想』中公クラシックス

本書は、戦後日本の論壇に現実主義の立場から貢献し、多くの弟子も輩出した著者の初期の論文集。著者の論壇デビュー作である「現実主義者の平和論」から、本のタイトルとなっている「海洋国家日本の構想」など1960年代に書かれた7本の論文が掲載されており、日本で国際関係・国際政治を学ぶなら必読書だ。今からおよそ50年前の論文集とはいえ、今日の日本、アジア、そして世界を考える上で多くの示唆を残している。特に、「海洋国家日本の構想」は、西洋でもなく東洋でもない日本の針路を示すものとして、学者・研究者だけではなく、政治家・官僚の間でも高く評価されている。私も、この論文に刺激を受けて、(遅れに遅れてはいるが)新書を執筆中。みなさんにも、ぜひ日本の現実主義学派の原点に触れてもらいたい。

☞石黒桂(2020年)『段落論:日本語の「わかりやすさ」の決め手』(光文社新書)

本書は、文章を読み書きする際の段落の重要性に注目したユニークな内容となっている。文章を書くことを「引っ越し」にたとえ、部屋に散らばる様々な小物をそのままトラックに載せるのではなく、衣類、食器、文房具など、種類別にラベルを貼って段ボールに詰めれば効率的な引っ越しができるが、ラベルを貼って段ボールに詰める作業が、頭の中にある文を段落という段ボールに整理することと同じだと本書は指摘する。これは日本語だけでなく、英語にも当てはまることである。授業のレ

ポートを書く際にはもちろん、英語のリーディングやライティングにも本書は役立つだろう。

小林 裕子

私が偏愛する珠玉の三冊！

☞E.H.カー/井上茂(訳)(1945)『危機の二十年—国際関係研究序説—』岩波現代新書

ページを手繰るたびに国際政治の目指すべき方向を示し、大きな感動を与えてくれる珠玉の一冊です。表紙をめくるとまず、「来るべき平和建設者のために」。そのページをめくると「哲学者は想像の国家のための想像の法を作る。したがって、彼らの説くところは、きわめて高いがゆえにほとんど光明を与えぬ星のたぐいである」とあります。国際政治における、平和指向、現実主義、そして高邁な思想の大切さを説く、私の本棚の特等席に凜と座す一冊です。

☞Drucker, P. F. (2004). *The Daily Drucker 366 Days of Insight and Motivation for Getting the Right Things Done*. Harper Business.

一日一言、366日分のドラッカー教授の示唆に富み、元気が出る言葉が綴られています。ドラッカー教授は現代経営学の分野に哲学の思想をもちこんだ大きな功績を持つ方です。経済の本質をマネーゲームと誤認し、会社の構成員を単なる駒と考えがちな現代の経営学の流れに対して、大きな方向修正の必要性を示唆する偉大な思想家のことばがあふれ出てくる、とても素敵な一冊です。表紙の砂時計の写真が、なんと深い味わいを醸し出しています。私が2番目に尊敬する人物です。2番目に尊敬する人は私には20人程いますが...

☞小林秀雄(2005)『小林秀雄対話集』講談社文芸文庫

私が2番目に尊敬する小林秀雄先生の著書の全てが私の心を捕えて離しません。小林秀雄先生の著書は次のページに進むのが楽しみすぎて、先に進むのがもったいなくなるような面白さです。私が誰にも負けない「批判精神」を持って社会を

見ていること、「美しさ」に絶対的な価値を置くことは小林氏の思想から大きな影響を受けているからにほかなりません。本当の「美しさ」とは何か、については小林秀雄先生の著書から読み取ってください。私は小学生のころから小林秀雄先生の著書の読后感想を、私が一番尊敬する人と語り合うことが大好きでした。私は、私が一番尊敬する人のために全力で毎日を生きています。

《大学生が教養として読むべき本として、以下 3 冊を追加推薦》

☞山口二郎（2019）『民主主義は終わるのか』岩波新書

数に頼ることが民主主義ではありません。山口二郎（法政大学教授）は、「民主主義を担う市民に必要な美徳は、正義感、正確な認識、楽観と持続性である」と述べています。地球市民として心に留めるべき大切な言葉です。

☞原田國男（2017）『裁判の非情と人情』岩波新書

多くの逆転無罪判決を出した元裁判官のエッセイが集められています。軽妙ですがその内容は深く心を揺さぶります。2017 年にエッセイスト賞を受賞したベストセラーです。

☞福沢諭吉（齋藤孝訳）『現代語訳 学問のすすめ』（2008）ちくま新書

原本は約 150 年前に福沢諭吉によって書かれたものですが、齋藤孝によって読み易く紹介されています。明治の初頭に紡がれた言葉は令和の時代に益々輝きを放っています。

前田 隆子

☞白井恭弘（2008）『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』

岩波書店

皆さんは今までに6年間もしくはそれ以上の長い期間、英語を勉強してきたと思いますが、英語を身につけるのはどうしてこんなに大変なんだろうと思っているかもしれませんね。本書では、第二言語習得研究の成果がわかりやすく紹介されています。どのような外国語学習法がより効果的か、どのような人が外国語学習に成功するのか、といった問いに答えてくれます。自分の勉強法に疑問を持っている人は是非一読してください。

☞斎藤兆史（2000）『英語達人列伝—あつぱれ、日本人の英語』中公新書

明治から昭和にかけて活躍した日本人たち(新渡戸稲造、岡倉天心、鈴木大拙、野口英世、白洲次郎 他)がいかんにして洗練された完璧ともいえる英語力を身につけたのかが伝記形式書かれています。岡倉天心がボストンでアメリカ人の若者に侮蔑的な英語を投げかけられ、それに対してうまく切り返した場面(p.39)は爽快です！英語達人を目指したい人は読んでみてください。

☞平田オリザ（2012）『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書

劇作家、演出家であり、大学でも教鞭をとる筆者が、「わかりあう」ことに重点が置かれるコミュニケーション教育に対し、「わかりあえない」ところから出発するコミュニケーションを考察する本です。この先の人生は多様な価値観も持った人々と、仕事やコミュニティにおいて出会うことでしょう。その前にコミュニケーション能力とは何かをこの本で再考するのもよいでしょう。

☞オードリー・タン、クーリエ・ジャポン編集チーム（2020）『自由への手紙』講談社

オードリー・タン氏は、台湾のIT担当大臣であり、わずか3日間で新型コロナウイルス対策のためのリアルタイムでマスクの在庫がわかる「マスクマップ」を開発した

人としても一躍有名になった方です。格差、ジェンダー、デフォルト、仕事から自由になるための考え方が述べられた本です。「当たり前」からの解放、という視点に興味がある方は是非手に取ってみてください。

松井 順子

☞ Mark Twain/ Guy Cardwell(Ed.). (1986). *The Adventures of Tom Sawyer*. Penguin Classics, Penguin Books.

This is a book about a young boy, Tom, who lives with his Aunt Polly. Tom represents the constraints and conventions of this world – a boy who wants to break free, but remains within the confines of the world he was born and raised in. His antithesis, Huckleberry Finn is the epitome of freedom and at the same time, he represents the reverse side of that coin: poverty, anxiety, and an unstable life – the other side of freedom which Tom probably does not fully see. In an imperfect world, “freedom” is never complete. Pick and choose – the limited “freedom” of a comfortable traditional life – Tom’s freedom, or the “freedom” to ignore society, and pay the penalty – Huckleberry Finn’s freedom.

☞ Lewis Carroll. (1865/2000). *Alice’s Adventures in Wonderland and Through the Looking Glass*. Signet Classic. Penguin Books. [paperback]

This story about a girl who falls into a hole into a different world, changes our perspective on life. Alice tries to apply the book learning from school in this new world, but nothing works. She grows, then shrinks, and goes through a range of wild experiences. Here, none of the “conventions” of normal life apply. Big ... small ... right .. and wrong ... are all reversed. Despite the ridiculous setting and the ridiculous story, *Alice in Wonderland* continues to inspire and captivate audiences of all ages and walks of life, reminding us that much of what we take for “normal” could simply be a matter of perspective.

注:上記の本に関連して、下のCD, DVDも図書館に揃えました。

- ☞ Lewis Carroll. Alice in Wonderland CD Pack (Book & CD). Penguin Readers Simplified Text.
- ☞ Alice in Wonderland (Book of the Film) Tim Burton、 Linda Woolverton Puffinbooks. Penguin Books. Disney Enterprises.
- ☞ アリス・イン・ワンダーランド [DVD] 出演 ジョニー・デップ、ミア・ワシコウスカ、ヘレナ・ボナム＝カーター、 アン・ハサウェイ (DVD - 2010)

Keiko Nakamura

☞ Shel Silverstein. (1964). *The Giving Tree*. HarperCollins.

For students studying a foreign language, there is nothing more satisfying than being able to read a meaningful book from cover to cover. The fact that this book has simple pictures may make it seem like children's literature; however, its message is a powerful one which can be appreciated by readers of all generations. On the one hand, it is a story about unconditional love and selfless generosity; on the other hand, it is a sad lament about the passage of time, in which a boy goes from childhood to old age.

☞ Jean Aitchison. (2008). *The Articulate Mammal*. Routledge.

This introduction to psycholinguistics has been a classic in the field for almost 40 years. Aitchison explores many interesting controversies in the field: What is language? Do animals have language? How do children learn language? Is language innate or learned? How do babies prepare for language? How do we understand and produce speech? What happens when language breaks down? In addition, she discusses several new state-of-the-art topics in the field, such as language and evolution, as well as the possibility of a "language gene." This is an excellent and easy-to-read text, filled with interesting examples.

☞ Roger D. Hock. (2015). *Forty Studies that Changed Psychology: Explorations into the History of Psychological Research*. Pearson.

This book is a wonderful glimpse into the wonders of psychology, exploring the complexities of human nature. It covers 40 classic studies, presenting the research and results of the most famous studies which have greatly influenced the field of psychology. It presents studies on learning, cognition and memory, intelligence, personality, motivation and emotion, as well as social psychology. Each reading is relatively short, but packed with information and ideas which will make you eager to learn more about the human mind and behavior.

嶋田 珠巳

☞ 梶茂樹／中島由美／林徹編 2009『事典 世界のことば 141』大修館書店

世界 141 の言語について、基本的な言語情報、簡単な挨拶・表現例、お薦めの本や信頼できるウェブサイト、さらにその言語を話す人々の暮らしが紹介されています。現地で調査を行っている日本のフィールドワーカーが執筆しているので、なまの情報が得られます。

☞ 真田信治 (2001) 『方言は絶滅するのか 自分のことばを失った日本人』PHP新書

私たちの普段の会話にみる方言と標準語の混交、アクセント型など、自らの言語使用について内省とともに考えることのできる本。方言ないし言語の消滅、方言の変容と変化の動態、方言と教育といったトピックについて深く考えたい人にもそのきっかけを与えてくれそう。

☞ ルイ＝ジャン・カルヴェ／砂野幸稔ほか訳(2010)『言語戦争と言語政策』三元社

カルヴェはチュニジア生まれ、フランスの社会言語学者。原著が出版されたのは 1987 年とずいぶん前ですが、当時の論考は色褪せないどころか、いま言語学が取り組むべき課題を明るみに出します。言語の社会的側面がいかにして言語内

部にはたらきかけるのか。たとえば第 9 章「言語の死」における、ボリビアのケチュア語がスペイン語との言語接触をうけてどのように変わっていくかの記述は、その考察のお手本実践。

⇒ 嶋田珠巳(2016)『英語という選択—アイルランドの今』岩波書店

アイルランド英語をめぐる自分の研究のことを書いた拙著。みんなの感性に触れて、引っかけたところ、好きな章をぜひお聞かせください。著者の「英語学特講Ⅲ」も合わせてどうぞ。

⇒ 嶋田珠巳・斎藤兆史・大津由紀雄編 (2019)『言語接触—英語化する日本語から考える「言語とはなにか」』東京大学出版会

言語接触 (language contact) の深みに 12 名の著者が誘います。これから日本語はどうなっていくのか、英語とどうつきあうのかといった問いを真剣に考えたい人が読むといい本です。いや、それ以上かも。ちょっと見てみて。

辰 雄太

⇒ 佚斎 樗山 (著), 石井 邦夫 (訳注) (2014)『天狗芸術論・猫の妙術 全訳注』講談社学術文庫

天狗と猫が出てくる物語をまとめた短編集です。どういうジャンルに分類したらよいか難しいですが、あえて言うなら武道についての秘伝書でしょうか。ただ、武術や剣術に限った話ではなく、本の内容を抽象化して、他のいろいろなことに関係するお話として読めると思います。私も研究者として、影響を受けた部分があるかもしれません。物語の内容は、ぜひご自身で確かめてみてください。

本の内容とは関係のない話ですが、今、Google Translation に「彼は天狗になっている」と入れると、“He is a tengu.”と訳されました。間違いではないですが、「天狗になる」は多くの場合、この意味では使われません。英米語学科の皆さんは「天狗になっている」を英語で説明できますか？

☞ J.D. サリンジャー (著), 野崎 孝 (翻訳) (1974) 『ナイン・ストーリーズ』 新潮文庫

サリンジャーの短編集です。サリンジャーと言えば『ライ麦畑でつかまえて』が有名かもしれませんが、もしかしたら、名前くらいは聞いたことがある人もいるでしょうか。この短編集に収録されている物語は、どれも独立しているのので、必ずしも全てを読む必要はありません。それぞれのタイトルを見て、気になった物語だけを読んでも、問題ないと思います。

私はアメリカのコネチカット州に五年ほど留学していたので、この本に収録されている「コネティカットのひよこひよこおじさん」という作品に特に思い入れがあります。初めてこの物語を読んだのは留学する前でしたが、実際にコネチカット州で生活してから「コネティカットのひよこひよこおじさん」を読み返すと、物語により親近感を持てるようになりました。どんなことがきっかけになるかわかりませんが、学生の皆さんも、ぜひお気に入りの物語を見つけてみてください。

翻訳版もちろん良いですが、英米語学科の学生の皆さんは、よければぜひ一度、英語のものに挑戦してみてください。たとえ同じ桃太郎でも、アナウンサーが話すのと、落語家が話すのとでは、だいぶ印象が違うはずです。それと同じことが、日本語と英語でも起きるかもしれません。

☞ 土屋 賢二 (著) (1997) 『われ笑う、ゆえにわれあり』 文春文庫

哲学をご専門にされている土屋賢二先生が執筆された、ユーモアエッセイ集です。私は、人前ではこの本を読まないようにしています。別にこの本を読んでいることが恥ずかしいわけではありません。読んでいるとついつい笑ってしまいそうになるので、その様子を人に見られたくないからです。面白いという感覚は人それぞれ違いますが、学生の皆さんもこの本を読む時は、念のため、声を出して笑っても問題ない環境を確保してからにしたほうがいいかもしれません。

この本に出てくるユーモアの手法は、日本ではあまり一般的ではないかもしれませんが、しかしこの種類のユーモアは、文化的背景知識がなくても理解しやすいので、海外の人たちと話をするとき、利用できる機会が多いように思います。例えば、日本の漫才を単純に外国語に翻訳しただけでは、漫才という文化を知らない外国の方には、その面白さがなかなか伝わらないかもしれません。それに比べると、ユ

一モアはセンスを磨いておけば、文化の枠を超えて通用しやすいはずです。私は文化史などについては全くの素人ですが、ユーモアという手法の有用性を感じる経験が、アメリカ留学中に何度かありました。英米語学科の学生の皆さんも、ユーモアというものを知っておいて、損はないと思います。

梅谷 博之

☞幸田露伴(原著)・渡部昇一(編述)(2007)『幸田露伴の人生哲学名著『努力論』—小さな努力で大きく報われる法』三笠書房

1912年に出版された幸田露伴の『努力論』のエッセンスを紹介した本です。「小さな努力で大きく報われる」というキャッチコピー的な文言が題に含まれていますが、安易なハウツー本ではありません。仕事や目標の達成のために心掛けるべき重要なことが書かれてあります。

現在この書籍は絶版になっていますが、自治体の図書館などで借りることができます。あるいは、幸田露伴の『努力論』を紹介する本はこの本以外にもいくつかありますので、それを読むのもよいと思います。

☞桑田真澄(2010)『心の野球—超効率的努力のススメ』幻冬舎

私はプロ野球は観戦しません。ですので、著者については「有名な野球選手」という程度の認識しかありませんでした。ある日のテレビ番組で、著者が引退後に指導者として活躍している様子を紹介していました。それがきっかけとなってこの本を手に入れました。

本のタイトルが示すように、努力、それも合理的・効率的な努力の重要性を筆者は説きます。他にも、周りの人への感謝を忘れないこと、「試練」を自分を磨く砥石と考えるべきことなど、筆者のさまざまな考えが体験談とともに書かれてあります。

こうした心がけを持つことの大切さは皆さんもすでに知っており、その意味では新しいことは書かれていないかもしれませんが。しかし実行することは難しいものです。筆者はそれを実行してきました。そうした著者の文章を読んで、私は自分の甘さを

痛感しました。野球好きの人に(そしてそうでない人にも)お勧めします。

☞和田秀樹(2008)『「グズ」の習慣が直る本』新講社

私は「グズ」です。それを少しでも直したいと思ってこの本を読みました。

筆者は「多くの場合、「グズ」というのは、能力というより、性格や心理学的な問題なのです。だから、ちょっとだけ考え方ややり方、あるいは生き方を変えるだけで直ることがほとんどです」と述べています(まえがき5ページより)。

この本には「グズ」から抜け出すいくつかのヒントが書かれてあります。自分の「グズ」を何とかしたいがどうすればよいか分からない人は一度読んでみてはいかがでしょうか。

この書籍も(最初に紹介した『幸田露伴の人生哲学名著『努力論』』同様)現在では絶版になっています。電子書籍では読めるようですが、紙媒体で読みたい人は自治体の図書館などで探してみてください。

横溝 祐介

☞森毅(1991)『エエカゲンが面白い』ちくま文庫

「大学生」にふさわしい本を一冊ご紹介いたします。私が大学生の時に、よくブックオフで文庫本を買いあさっていました。この本も100円で買った文庫本でした。著者は数学者で社会的にも有名な人物ですが、私の世代では知らない人の方が多いと思います。学生のみなさんならなおさらでしょう。この本の中の「大学サボリ道入門」の部分を読んでいると、学生時代は心が落ち着きました。就職して教員になった時は「評価について」が役に立ちました。今は「新入生への私的オリエンテーション」を読み返しています。著者の関西弁が聞こえてくるような、読みやすい一冊です。

☞養老孟司(2010)『身体の文学史』新潮社

「文学」についての本を一冊ご紹介します。思春期は「自分」というものに悩みがちですが、私はこじらせてしまっていてしばらく悩みました。その答えらしいものを見

つけられたのは、養老氏の本をたくさん読んだからだと思います。著者は学生時代「心理」の勉強を志したが、「解剖学」つまり「身体」の研究をすることになった人物です。この本では「文学」における「身体」を取り扱います。内容として「身体」を扱えば自然と「こころ」や「心理」も扱うこととなります。さらに「社会」的には禁忌とされそのような話題を文学だからこそ扱っている、そんな作品にも触れているスリリングな一冊です。

⇒福岡伸一(2012)『せいめいのはなし』新潮社

「言語を多角的に考えてみたい」そんな学生さんのために、一冊ご紹介します。この本は私が学生時代に、お世話になっている大学の先生に買ってもらった思い出の本です。「動的平衡」で有名な著者と数名の方々による対談本で、話題は多岐に渡ります。それぞれの「生命現象に対する目線」がユニークで面白く、話題も多岐に及びます。私は動的平衡という考え方も「英語」を理解する、特にいくつかの文法を理解しイメージを広げる上で、とても示唆に富んでいると考えています。





Recommended Reading for Eibei Students (Ver. 11)

Edited by Takeshi Tsurusaki
Published by Department of English,
Faculty of Languages and Cultures,
Meikai University, March 2021

**Recommended Reading
for Eibei Students,
Ver. 11
英米語学科推薦図書 2021**



Department of English

© 2020 Takeshi TSURUSAKI